

児玉町文化財調査報告書 第3巻

阿知越遺跡 I

児玉遺跡群保存事業に伴う発掘調査報告書 I

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

児玉町文化財調査報告書 第3巻

阿 知 越 遺 跡 I

児玉遺跡群保存事業に伴う発掘調査報告書 I

1983

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

序

悠久の昔、わが町児玉を舞台にくり広げられた歴史の数々は、脈々と生き続けた祖先の生活と努力の結晶であります。歴史の古い児玉町には、これらの歴史を裏付ける貴重な文化財が数多く残されており、わが町が全国に誇るべきもののひとつといえましょう。これらの文化財を永く後世に継承することは、我々に課せられた使命と考え、日夜その保護と活用にあつめてまいりました。このたびもその保存措置につきまして、関係機関や施工者等と再三の協議を重ね、現状で保存できるよう要望してまいりました。しかし現状での保存は難しいとのこと、やむおえず万全の調査をもって記録という形で後世に伝えることになったものです。

このように、本報告書が無事発行できましたことは、調査関係者各位はもとより国・県・町当局さらに住民の皆様の深い御理解と御協力の賜と存じ、心より感謝申し上げる次第でございます。

このささやかな報告書が、広く町民の皆様や、教育・研究にたずさわる皆様の御参考になれば幸甚に存じます。

昭和58年3月10日

児玉町教育委員会教育長

石 井 栄 一

例言

1. 本書は、埼玉県立玉敷第三高等学校図書室に所蔵する和歌集『神皇正統記』の複製本である。
2. 複製対象は、個人学七律館に所蔵する『神皇正統記』複製事業として昭和60年度に文部省教育委員会が実施したものである。
3. 複製調査および整理・写写作業に要した経費は、町費・国庫補助金（文化庁）、および助費補助金（埼玉県教育委員会）である。
4. 本書の複製寸法は64分の1を標準とし、本文はすべて標準寸法である。扉裏面にこの寸法を標準（㎜）である。また上製紙正の幅尺は4分の1、その他の頁物は3分の1とした。
5. 本書の複製は、監修者による協力による複製ではない。各複製分冊については各文庫に記した。
6. 複製調査および本書作成にあたって下記の方々や機関から御協力・御協力を賜った。記して感謝の意を表わしたい。（漢字・仮名略）
原田浩一、藤崎 一、西本幸男、菅原勉男、藤原史朗、坂本龍敏、菅野健一、菅谷浩之、利根川敏彦、中村吉夫、西門正統、長谷川豊、奥村正美、樋口誠司、山田徳武、埼玉県教育庁文化財課管理、美土村教育委員会、埼玉県埋蔵文化財調査事務所
7. 本書作成の主な複製分冊は次のとおりである。
土器分冊・足元（林朝代、原田幸子、正田照代） 土器分冊（林朝代、原田幸子） 土器大冊（市川淳子、十條智、奥内勉、佐藤忠一、石原英子、佐藤美夫、志村内昭彦）（巻トレース（田山照代、市川淳子） 金器および石製品大冊（市川淳子、成田千鶴子） 漆器銅器長巻（田山照彦、島田浩之、植田忠一、市川淳子、志村内昭彦、正田照代） 漆器トレース（佐藤美夫、原田幸子、志村内昭彦、田山照代） 金器（アラ）（原田幸子） その他（城山勉、西川俊樹、大塚道弘、松本光輔）
8. 本書は、複製・校正を十分に実施したもので、本文は別法刊行の予定である。

阿知城遺跡調査記録

調査員 櫻井幸平 奥村明彦
協力員 水島定規太郎 北工町教育委員会教育長（当時）
調査員名 金子 豊
事務所 三上光一 北工町教育委員会社会教育課

発掘調査参加者

内田タケ子、横沢（？）子、大谷敦子、丸藤文律子、倉林真由、古林久子、小林千恵子、小林隆子、堀崎のり子、宮内初代、金子光正、藤沢林一、松村泰治、藤原タカ子、山田悦正（池見有憲）

河辺邦彦、原田忠一、横崎重、鈴木純、高野政之、松本雅夫
（学生有志）

凡 例

遺構内遺物

- 土器（土器器・調査器）
- ▲ 磁器品
- △ 瓦（瓦）
- 漆器（漆器）

（遺物出土位置図における実線は同一層位であることを示し、点線は各層位の調査範囲は、異なっている。）

遺物採回

 黒色処理

 海綿状処理

目 次

序

第I章	発掘調査に至る経過	1
第II章	遺跡の地理的・歴史的環境	3
第III章	調査の経過	7
第IV章	遺跡の概要	8
第V章	遺構と遺物	11
第1節	壘穴住居址	11
第2節	竪立柱建物遺構・ピット群・土坑・溝	26
第VI章	阿知越遺跡の提唱する問題	81

写真四版

插图目录

图1-1 新加坡的鸟瞰图(1) (1940年代)	3
图1-2 新加坡的鸟瞰图(2) (1950年代)	4
图1-3 新加坡的鸟瞰图(3) (1960年代)	6
图1-4 新加坡的鸟瞰图(4) (1970年代)	8
图1-5 新加坡的鸟瞰图(5) (1980年代)	10
图1-6 新加坡的鸟瞰图(6) (1990年代)	12
图1-7 新加坡的鸟瞰图(7) (2000年代)	14
图1-8 新加坡的鸟瞰图(8) (2010年代)	16
图1-9 新加坡的鸟瞰图(9) (2020年代)	18
图1-10 新加坡的鸟瞰图(10) (2030年代)	20
图1-11 新加坡的鸟瞰图(11) (2040年代)	22
图1-12 新加坡的鸟瞰图(12) (2050年代)	24
图1-13 新加坡的鸟瞰图(13) (2060年代)	26
图1-14 新加坡的鸟瞰图(14) (2070年代)	28
图1-15 新加坡的鸟瞰图(15) (2080年代)	30
图1-16 新加坡的鸟瞰图(16) (2090年代)	32
图1-17 新加坡的鸟瞰图(17) (2100年代)	34
图1-18 新加坡的鸟瞰图(18) (2110年代)	36
图1-19 新加坡的鸟瞰图(19) (2120年代)	38
图1-20 新加坡的鸟瞰图(20) (2130年代)	40
图1-21 新加坡的鸟瞰图(21) (2140年代)	42
图1-22 新加坡的鸟瞰图(22) (2150年代)	44
图1-23 新加坡的鸟瞰图(23) (2160年代)	46
图1-24 新加坡的鸟瞰图(24) (2170年代)	48
图1-25 新加坡的鸟瞰图(25) (2180年代)	50
图1-26 新加坡的鸟瞰图(26) (2190年代)	52
图1-27 新加坡的鸟瞰图(27) (2200年代)	54
图1-28 新加坡的鸟瞰图(28) (2210年代)	56
图1-29 新加坡的鸟瞰图(29) (2220年代)	58
图1-30 新加坡的鸟瞰图(30) (2230年代)	60

第1章	第1章 导论	1
第2章	第2章 线性规划	10
第3章	第3章 非线性规划	15
第4章	第4章 网络流	20
第5章	第5章 动态规划	25
第6章	第6章 图论	30
第7章	第7章 排队论	35
第8章	第8章 存储论	40
第9章	第9章 决策论	45
第10章	第10章 对策论	50
第11章	第11章 模糊数学	55
第12章	第12章 灰色系统理论	60
第13章	第13章 粗糙集	65
第14章	第14章 数据挖掘	70
第15章	第15章 知识发现	75
第16章	第16章 神经网络	80
第17章	第17章 遗传算法	85
第18章	第18章 粒子群优化	90
第19章	第19章 蚁群优化	95
第20章	第20章 模拟退火	100
第21章	第21章 禁忌搜索	105
第22章	第22章 免疫算法	110
第23章	第23章 进化计算	115
第24章	第24章 模糊聚类	120
第25章	第25章 模糊识别	125
第26章	第26章 模糊控制	130
第27章	第27章 模糊推理	135
第28章	第28章 模糊决策	140
第29章	第29章 模糊优化	145
第30章	第30章 模糊控制	150
第31章	第31章 模糊识别	155
第32章	第32章 模糊控制	160
第33章	第33章 模糊推理	165
第34章	第34章 模糊决策	170
第35章	第35章 模糊优化	175
第36章	第36章 模糊控制	180
第37章	第37章 模糊识别	185
第38章	第38章 模糊控制	190
第39章	第39章 模糊推理	195
第40章	第40章 模糊决策	200
第41章	第41章 模糊优化	205
第42章	第42章 模糊控制	210
第43章	第43章 模糊识别	215
第44章	第44章 模糊控制	220
第45章	第45章 模糊推理	225
第46章	第46章 模糊决策	230
第47章	第47章 模糊优化	235
第48章	第48章 模糊控制	240
第49章	第49章 模糊识别	245
第50章	第50章 模糊控制	250

第47回	第7号住居地区土建物	55
第48回	第7号住居地	56
第49回	第7号住居地区マップ	57
第50回	第7号住居地区の歴史	58
第51回	第8号住居地区土建物	59
第52回	第8号住居地区およびマップ	60
第53回	第8号住居地	61
第54回	第8号住居地区の歴史およびマップ	62
第55回	第8号住居地区土建物(1)	63
第56回	第8号住居地区土建物(2)	63
第57回	第8号住居地区土建物(3)	64
第58回	第8号住居地区土建物(4)	65
第59回	第9号住居地区マップ	66
第60回	第9号住居地	67
第61回	第9号住居地区土建物(1)	68
第62回	第9号住居地区土建物(2)	68
第63回	第10・11・12号住居地	69
第64回	第10号住居地区およびマップ	70
第65回	第11号住居地区土建物	71
第66回	第12号住居地区およびマップ	72
第67回	第12号住居地区土建物	73
第68回	第13号住居地区と町制施行	74
第69回	第14・15号土建物	75
第70回	阿倍郡通町八幡宮土型複製機(複製)	76

第六节 第 3 号司法解释的适用范围	15
第七节 司法解释的 A 类与 B 类之别	16
第八节 第 1 - 2 - 3 号司法解释的适用范围 (第 1 - 1 - 1)	16
第九节 第 4 号司法解释的适用范围 (第 1 - 4)	17
第十节 第 5 号司法解释的适用范围 (第 1 - 5)	18
第十一节 第 6 号司法解释	19
第十二节 第 7 号司法解释 (1)	20
第十三节 第 7 号司法解释 (2)	21
第十四节 第 8 号司法解释 (第 1 - 1)	22
第十五节 第 1 - 6 号司法解释 (第 1 - 1 - 6)	22
第十六节 司法解释的效力与适用规则	23
(参考资料)	
第十七节 司法解释的制定与公布	27
第十八节 司法解释的效力与适用规则	27
第十九节 司法解释的制定与公布	28

表 目 次

表 1 表 司法解释一览表	3
表 2 表 司法解释的效力	7
表 3 表 司法解释的 A 类与 B 类之别	16
表 4 表 第 1 - 6 号司法解释	22
表 5 表 司法解释的效力与适用规则	23
表 6 表 司法解释的制定与公布	27

第1章 発掘調査に至る経過

調査の経緯

昭和50年1月12日、埼玉県重要文化財指定を目的とした地蔵の近隣西武池袋線（現西武池袋線）135の区画（池袋地区、約1,500㎡）においてゾナドレーザーで調査をしているという通報が、県文化財センターから町教育委員会にあった。たまたかに町内職員が現場へ立ち入り確認したところ、当該区域の表土が50cmから1mあまりを削面によって削り取られており、表面に土器片が多量に散見し、数軒の住居跡が確認でき、一部ではすでに削り取られている住居跡もあった。早速調査者を現場へ呼び町重要文化財の保護について説明し資料を求めるとともに、調査行為の目的によって事情を聞いた。その内容は下記の通りである。

当該区域およびその周辺は神奈川（第二次大戦後）創設された、農地として1950年代初頭まで耕作されていたが、その後放棄され荒れており30年程度の草が繁茂しており土地の境等ささあからなくなってきたため、とりあえず表土を削いで境等をはっきりさせるための創設内海市境界線を定まらせて行ったものである。

表土を削ぎ境等をはっきりさせた後、調査を行ない、当該地域の開発の状況もみて調査地を建設する計画である。

運用者の意向については、以下のとおりであった。

備 考

しかし、現状は遺跡が調査上に露出し、そのまま放置しておけば雨水等により浸食するおそれが多量にあった。また、削いだ表土は子の谷の部分に埋土として用いたため掘削して現状保存することもできない条件にあった。このような状況のため、県文化財保護課と協議したところ、運用者に対して今後の土地利用計画について、現地を目的とした調査をしない条件であれば、昭和50年度国庫補助事業で発掘調査を実施しても差しつかえないという理解を要した。この同意が調査者に伝えるとともに再度協議したところ、町重要人の自宅を建設したいということであった。町教育では、平成昭和50年度予算に計上し、実施するよう求めた。かくして同年度は、昭和50年度事業で発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、昭和50年10月17日付町教育第17号で発掘調査通知が提出され、昭和50年1月18日より調査が開始された。担当者には金子孝氏が当たった。

県文化庁からは昭和56年2月5日付県保記第3685号をもって発掘調査に対する許可が通知があった。〔事務録 工上元一〕



图 1 茎 木 的 横 切 面 的 结 构 (小 木 材)

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

遺跡の名称

本遺跡は、埼玉県児玉郡志木町大字元荒字神宮跡に所在し、「埼玉県史跡遺跡調査」の元荒町-志木に相当するもので、その小字名から**元荒遺跡**と呼称する。

地 形

遺跡は、神流川扇状地である本庄西面上に存在する第三紀層の境層である**生野山**の裾野近くの北西向き斜面にあたり、標高は約100mから102mを距る。この生野山丘陵下には、八王子-志野間遺跡の裾野地下付託より湧出する**金栗川-志野川水系**に属する支脈群によって刻まれた沖積地が展開し、これらを中心にして扇状地を典型形取囲りの遺跡を認めることができる。また、遺跡の南側には生野山丘陵の支脈である**志野川**があり、その北側の湧水点を中心にして扇・楕圓という形状がつくられている。生野山の南麓にも志野川扇状地の丘陵が広がっており、丘陵下より扇状地湧水があるが、ローム層上に小山岡（**扇形地**）の付託によって形成された遺跡が散在する花園塚となり、扇形地取囲りの遺跡は認められていない。小山岡は、この付近では凡そし水質は少なく、扇状地地層群のあり方を示している。

遺跡周辺の基盤層は生野山丘陵と呼ばれる第三紀層で、その上に粘土層とろけ土層の二層が展開し、表土は褐色しているためやや暗い地層である。

歴史的環境

ここに報告する**元荒遺跡**の所在する元荒町元荒は、埼玉県北西部の旧武蔵國の北縁近くであり、古代の凡吾郡に比定される地域である。古河繁興館によると**西大郡**、**飯土郡**、**吾人郡**、**志野郡**の四郡が存在したことが知られる。本遺跡がこれらのうちの郡に比定される区域であるのかは、遺跡がありいざしる所解ではない。しかし、これらのある郡を構成する主要な支流のひとつに相当するものであろう。

旧元荒郡の領域は、**金栗川-志野川水系**（**女栗川-丸那水系**）を中心とする沖積地に展開し、田舎志原との境界を神流川扇状地扇状地中央に、志野川との境界を小山岡（**扇形地**）とする範囲と考えられる。また更に、志野川扇状地を一面に上野川扇状地、西に神流川を挟んで上野川扇状地に隣接しており、古墳時代より後述との関係も深い。

扇状地の武内社には**神祇大社**という異稱の格式を採った金倉の神社（**金栗神社**、**武蔵國「の宮」**）がある。また寺岡跡には城上野南寺があり、元荒町南側の「**志野南寺**」と別名の特丸堂が宮土しいる（**五箇誌**、1982）。この他に室町時代の名称と考えられる元荒町河内「**寺川南寺**」も存在している。旧元荒郡内には更に享平二年（1331）に創設となった釋迦僧院の存在が知られている。

本遺跡の周辺には古墳時代の遺跡が存在しているが、古墳時代後

凡 例



古墳時代
後期の遺跡



古 遺 跡



元荒遺跡



图 22 纤维状结构的电镜照片 (1000 \times)

奈良 平安時代の遺跡

類では本遺跡をのぞく生野山元墳上や、生野山南麓の辺り辺にも古墳群が形成される(第1図)。これらの区域は、近畿の他遺や河野の区域ともあいまって墓域として認識されていたためか、現在までのところ詳細な調査跡は発見されていない。この時期の墓域跡は、女野山の自然環境上に集中的に形成される傾向が認められることは既述される。

奈良・平安時代に入ると、従来の自然環境上にも墓域が広がるが、むしろ墓域形成区域の中心は沖積地の周辺つまり生野山南麓の福岡町や女野川右岸の広い低地内に移り、必ずしも古墳時代前期の墓域とは連続しないことは注目してよい。また、平安時代中期から西が墓域が拡散する傾向も認められるが、その内容は詳くない。

本遺跡から約200m西方には、1978年に地下埋蔵物調査が実施調査を実施した福岡下遺跡(調査,1977)がある。遺跡下遺跡は奈良・平安時代の墓域跡で、法住院3軒と佛の被葬物遺構、土埴、溝、ピット跡等が検出されており、本遺跡と同地的に存在した遺跡と考えられ周辺に有形的な関連が予想される。なおこの遺跡と本遺跡との間にはゆるい谷が入り、この二墓域を明確に区分している。

また本遺跡から2.5km北方には、奈良・平安時代の住居地的に埋蔵物類が検出されている古井戸-石室遺跡(井上・高橋,1982)がある。

(調査結果)

凡 例



奈良・平安時代の墓域



沖積(北方)



沖積(丸城)



沖積(政具)

番号	遺 跡 名	文 献	備 考	
1	生野山古墳群	(菅原-高古,1973)	同-た?	
2	完全下町古墳群			
3	大久保古墳群	(大 淵他,1960)		
4	長沖古墳群	(金子他,1980)		
5	穴籠塚-古井戸遺跡	(井上-高橋,1982)		
6	高野小学校跡古墳群		同 類	
7	藤川南遺跡			
8	古井戸遺跡			
9	福岡下遺跡	(藤 吉,1976)		
10	河知起遺跡	本 報 文		
11	塚山古墳	(伊 田他,1975)		
12	金鐘神社古墳	・		
13	生野山獅子塚古墳	・		
14	生野山正角点古墳	・		
15	生野山御家塚古墳	(松 野,1964)		
16	生野山9号墳	(菅原-高古,1973)		
17	長沖13号墳	(金子他,1980)		
18	福岡南遺跡		同 類	
19	八幡山遺跡南側	(藤 吉,1973)		

第1表 周辺遺跡一覧表

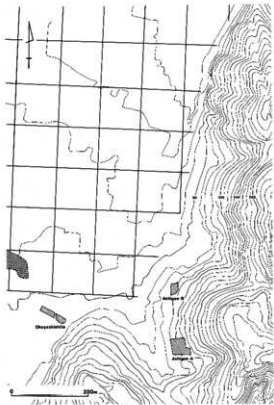


图 2 某地地形图及等高线地形图

第1章 調査の経過

調査前の状況 利根川遊歩人歩道の調査は、昭和50年11月5日より昭和51年1月31日までの調査期間(1)・2月1日までの作業の進捗をまとめる。約4ヶ月の期間が経過したものである。
調査対象区は、既に宅地造成工事により遊歩道が除去され、遊歩道の機能喪失にまで達しており、部分的に遊歩道の一部が復元あるいは復旧されてしまっていた状況であった。

調査の経過 調査開始は、遊歩道の復元作業から着手し、既平の残った遊歩民人の歩道全線で遊歩道調査、治水、土留置が確認され、順次各遊歩道の順で作業と調査を進めた。調査も12月に入り、市流神の北100mに位置する利根川遊歩道(遊歩道)の調査をも開始し、併せて作業を進める事とした。10月の雨も一過期し、しばらくは遅く上州の山々から吹り出すからっ風の中の作業に耐えねばならなかった。年の終わりの12月には、利根川遊歩道(遊歩道)の調査に作業の体制を整え、12月期の作業も約1ヶ月間作業した。12月に入り、調査を再開した。作業もかなり進み、調査を終った区も利根川遊歩道(遊歩道)に基づく治水工事の設計も決定した。その後、作業も手直し、実測、写真撮影を中心に作業を進めたが、最後に調査の終わった大型の区間(2)・3区間は、遊歩道の土留置も多く、作業が遅れ、最終的に3月期の調査が完了したのは、春の気配の感じられる3月次のことであった。そして、3月31日をもって1年度での調査を終了した。

尚、各遊歩道の調査経路は、第2巻に示した通りである。

(以下 略)



第11章 遺跡の概要

河川(遺跡)は、新石器時代の河川(遺跡)とその名残をつけたものである。また、河川(遺跡)が広い範囲に亘るため、遺跡(遺跡)をアルファベットで示す事とした。

遺跡は、全野山と新とされる河川の両側の両側に設置し、遺跡には北側より入り込みの河川(遺跡)を流す事で河川(遺跡)に存在する。その構造は 100m 前後を距る。

遺跡の概要 遺跡の概要は、河川(遺跡)に沿って遺跡(遺跡)を中心に南北 400m 程度の広がりを持つ。全野山(遺跡)にかけての河川の両側の両側に設置し、遺跡には北側より入り込みの河川(遺跡)を流す事で河川(遺跡)に存在する。その構造は 100m 前後を距る。

遺跡は、河川(遺跡)を対称に行い、南北にわたる遺跡は、全野山(遺跡)の中心に設置し、遺跡には北側より入り込みの河川(遺跡)を流す事で河川(遺跡)に存在する。その構造は 100m 前後を距る。

遺跡の概要 遺跡の概要は、河川(遺跡)に沿って遺跡(遺跡)を中心に南北 400m 程度の広がりを持つ。全野山(遺跡)にかけての河川の両側の両側に設置し、遺跡には北側より入り込みの河川(遺跡)を流す事で河川(遺跡)に存在する。その構造は 100m 前後を距る。

遺跡の概要 遺跡の概要は、河川(遺跡)に沿って遺跡(遺跡)を中心に南北 400m 程度の広がりを持つ。全野山(遺跡)にかけての河川の両側の両側に設置し、遺跡には北側より入り込みの河川(遺跡)を流す事で河川(遺跡)に存在する。その構造は 100m 前後を距る。

遺跡は、河川(遺跡)を対称に行い、南北にわたる遺跡は、全野山(遺跡)の中心に設置し、遺跡には北側より入り込みの河川(遺跡)を流す事で河川(遺跡)に存在する。その構造は 100m 前後を距る。

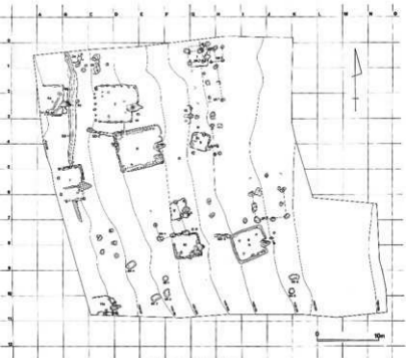


图 4 21 马王堆汉墓平面图

第V章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

第1号住居址（第5区、図版4-1）

1号住居址は、調査区北端の約面上に位置する。遺構内側部分は陥没して空地状となっており、

境内は、長さ300cm、幅200cm以上を測り、アツクは方眼あるいは長方形を示すことが予想される。土質方位は、南-西-東を示す。

境内は、ヤマト土が広く露出しており、北西角には1-2cmを測る。壁内は、灰で1.5cmを測る。

生草付内から発見された土塊、セッコ灰の片から、この住居址に伴うことが明らかなのはヤマト土の小ピット1基のみで深さが30cmを測る。

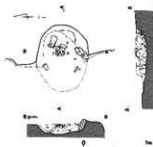
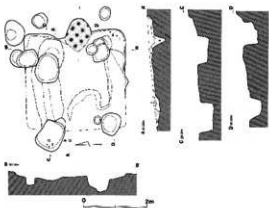
土土塊は少なく、そのうち2基は2-3cmは、空室上で検出されたものである。

オマド
（第5区、
図版4-2）

オマドに東向き面が露出され、土塊方位は南-西-東である。掘削は深さ約20cm、壁内1-2cmを測り、灰、セッコ灰は断面を測り、灰層は掘削部内側に露出されている。掘削は平地である。

第1号住居址オマド土層説明

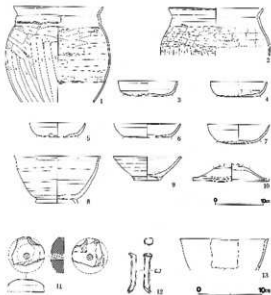
- 1層 暗赤褐色土（多数の褐色植物の腐乱土層下の腐乱ゾナを含む。植物灰）
- 2層 暗赤褐色土（1層より若干厚い。暗赤褐色土層にのみ、褐色植物の腐乱土層にのみ。腐乱ゾナを含む。植物灰）
- 3層 暗赤褐色土（腐乱土層を含む）
- 4層 暗赤褐色土（腐乱土層を含む。植物灰）
- 5層 暗赤褐色土（ヤマト土を含む。褐色植物の腐乱土層を含む。植物灰）
- 6層 暗赤褐色土（ヤマト土を含む）
- 7層 暗赤褐色土（褐色植物の腐乱土層を含む）
- 8層 暗赤褐色土（多数の白色植物の腐乱土層下の腐乱ゾナを含む。植物灰）
- 9層 暗赤褐色土（腐乱土層を含む。褐色植物の腐乱土層を含む）
- 10層 暗赤褐色土（腐乱土層を含む。褐色植物の腐乱土層を含む）
- 11層 暗赤褐色土（腐乱土層を含む。褐色植物の腐乱土層を含む）
- 12層 暗赤褐色土（他の暗赤褐色土よりやや暗色を呈し、腐乱土層にのみ含む）
- 13層 暗赤褐色土（腐乱土層を含む）
- 14層 暗赤褐色土（腐乱土層を含む）
- 15層 暗赤褐色土（褐色植物の腐乱土層を含む）
- 16層 暗赤褐色土（白色植物の腐乱土層を含む。植物灰である）



第三四 第二号の遺跡のまがひとア

第一号住居地土層説明

- 1層 埴原層粘土（灰山砂、炭化物及び焼土、砂を含む）
- 2層 埴原層粘土（灰山砂、炭化物及び焼土、粘土少量を含む）
- 3層 埴原層粘土（灰山砂を少量含む炭化物、焼土割合多量を含む）
- 4層 埴原層粘土（灰山砂を多量含む）
- 5層 埴原層粘土（灰山砂、炭化物及び焼土、粘土少量を含む）
- 6層 埴原層粘土（灰山砂を若干含む砂粒も、砂を含む）



第4図 第1期(宮城野土遺跡)

第2号住居跡(第8・9・10・11・12区, 図版5 1・2)

2号住居跡は、調査区北東部傾斜面上に位置し、面積する600平方メートル、長さ、3・6号住居跡とは約2mの距離である。

プランは、オマド人側壁が壁方に張り出す異なる形跡をなし、張り出し部分を含いた形跡では、東西約6m、南北約5.8mの正方形に近い、張り出し部分は、オマド側で幅約1m、北壁根で20〜25cm張り出し、北壁根は、2m75cm幅である。北壁方位は、N-90° Eをとり、

表面は、比較的平滑な面を形成し、量的成分による微細な凹凸が認められる。

断面では、放射状から同心状で、直径3mm、厚さ2mm、長さ20mm程度の個体が抽出され、また1mmを切る形で、長さ10mm程度の個体に断面に割って観察され、さらに厚さ約1mmで割っており、断面厚が約20mmを測る。断面厚が1mm程度になるが観察され、断面厚は20mm程度を測る。断面から抽出までの大きさは縦径で約20mm、直径では10mm程度である。

塊状は、遠征及び修整、製り所し部において抽出されており、断面では抽出されておらず、断面厚は、抽出されるもので約20mmを測り、厚さは直径から約20mmを測る。

断面は、断面平滑されている。その中で比較的安定であるものはない。支脚は、塊状に切り取って抽出であり、オマド断面では断面厚20mm程度に抽出された。断面は、断面、断面、断面でそれぞれ異なる。断面でも観察されている。断面は、断面で約10mmを測り、厚さは一定でなく、断面から約10mmとばらつきがある。

オマドに断面厚を測るに際しては、断面方向に一定の厚さである。断面厚は約20mm、直径約20mm、長さ約20mmの断面厚に一定を測っている。断面厚は約20mm程度厚さ約20mmを測り込み、これに約20mm長さ約20mmの断面厚を付与する。断面オマド断面のみ断面厚を約20mm程度測り込み、オマド断面は、断面に断面をつくる。オマド断面には、断面厚が約20mm程度測り込み、断面厚には断面厚が約20mm程度測り込み、断面厚は、断面厚が約20mm程度に測定されている。

オマド
断面厚
図説3-10

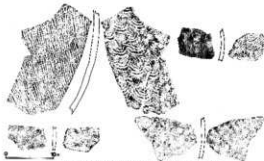
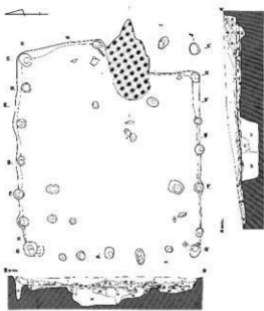


図3-10 オマド断面厚の測定方法



PLAN AND SECTION

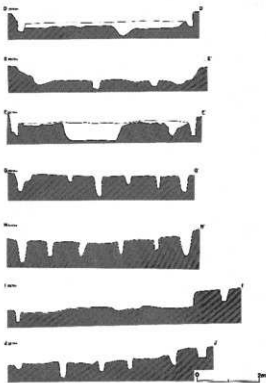
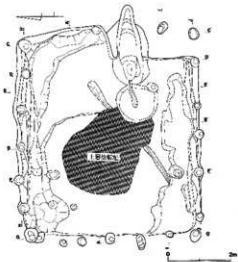


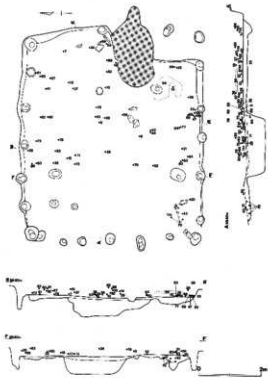
图 2-10 鄂西石炭系地质剖面图

表2号住居址
土層説明

- 1層 赤褐色土（粘土粒大、炭化物、ワーム腔子、火山灰を多少含む。）
- 2層 黒褐色土（1層より濃い色で、粘土粒大、炭化物、火山灰を多少含む、ワームブロック、ワーム腔子を多く含む。）
- 3層 黒褐色土（炭化物を多く含む、粘土粒大、ワーム腔子を多少含む。）
- 4層 黒褐色粘土（炭化物が主体で、粘土粒子を多少含む。）
- 5層 褐色粘土土（火山灰、炭化物をわずかに含む。）
- 6層 褐色粘土土（1層より暗い、炭化物をわずかに含む。）
- 7層 褐色粘土土（同上）
- 8層 赤褐色土（粘土が主体で、火山灰を粘土粒大、炭化物を多少含む。）
- 9層 暗赤褐色土（粘土粒大、炭化物を多少含む。）
- 10層 赤褐色粘土土（粘土）
- 11層 赤褐色土（粘土）
- 12層 暗赤褐色土（粘土が主体で、火山灰、ワーム腔子を多少含む。）
- 13層 赤褐色土（粘土）
- 14層 灰褐色土（灰褐色粘土が主体で、ワーム腔子、粘土粒子を多少含む。）
- 15層 暗褐色土（暗褐色のローム）
- 16層 暗赤褐色土（ロームブロックをやや多く含む。）
- 17層 暗褐色土（ローム、腐り葉）
- 18層 暗赤褐色土（16層より暗い色で、ワームブロックを多少含む。）
- 19層 暗赤褐色土（ロームブロックを多少含む。）
- 20層 赤褐色土（ロームブロックとの混合土、腐り葉）
- 21層 暗褐色土（暗褐色のローム）
- 22層 赤褐色土（ロームブロックとの混合土。）
- 23層 暗赤褐色土（18層より暗い色で、ロームブロックが細かい。）
- 24層 暗赤褐色土（ロームブロックとの混合土）
- 25層 暗赤褐色土（ロームブロックとの混合土）
- 26層 暗赤褐色土（ローム腔子を少量に含む、粘土粒を若干含む。）
- 27層 赤土（粘土を若干含む。）
- 28層 暗赤褐色土（ロームブロックとの混合土）
- 29層 暗赤褐色土（粘土粒、炭化物を若干含む。）
- 30層 暗赤褐色土（粘土粒と若干含む、炭化物ブロックを含む、28層よりやや暗い色である。）
- 31層 赤褐色土（ロームブロックとの混合土で、粘土粒、炭化物を若干含む、29層より暗い色調である、29層同）
- 32層 赤褐色土（灰褐色粘土ブロックを多く、粘土粒、ローム腔子を多く含む。）
- 33層 赤褐色土（粘土、ローム腔、粘土粒を若干含む。）



第104 第2号植物組織標本の断面図



图四四 第7号遗址的出土器物分布图

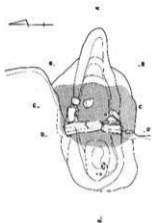


图129 笔石类化石

- 49型 磁土製壺（磁土製、厚肉製、口 外折リ、中台直付）
 49型 磁土製壺（磁土製、厚肉製、中台直付）
 49型 瓦製壺（口 外折リ）
 49型 磁土製壺（磁土製、厚肉製、中台直付）
 49型 磁土製壺（口 外折リ、中台直付、厚肉製、中台直付、口 外折リ）
 49型 磁土製壺（口 外折リ、中台直付、厚肉製、中台直付、口 外折リ）

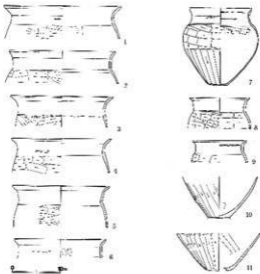
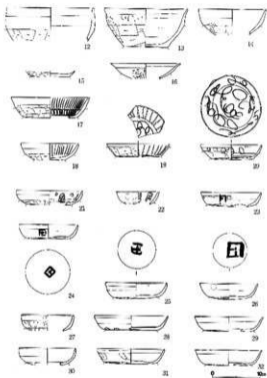


图334 图244件同种出土器物(1)



圖四四 新石器時代的陶器(續)

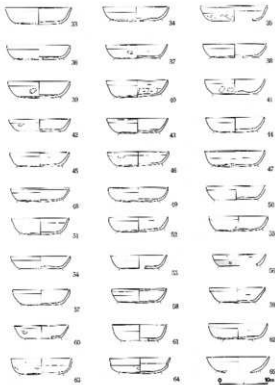


图100 晋中村出土的土陶器(3)

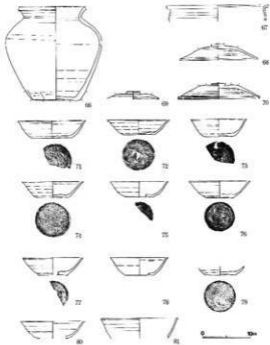


图10 图2号位址出土器物(4)

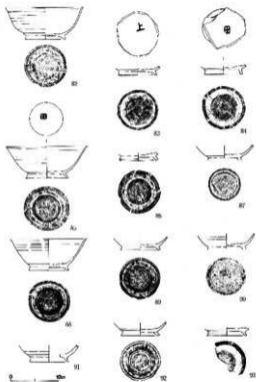


图174 第三号位器形(正、反、剖、底)

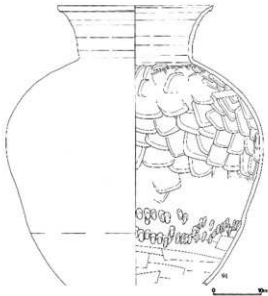


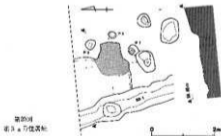
图100 第2号瓦窑址出土 原始器人物头1件



图101 第2号瓦窑址出土陶器

第3 a・b号住居址 (第20・21・22頁、図版7-1・2)

- 3 a住居址 (第20頁、図版7-1)
- 3 aの住居址は南北に東西に位置し、南北約4mに約4m住居跡が、南北約2mには3 m住居跡が存在する。
- 基礎は北側及び西側のプランク不明であるが、南北1m以上、東西1m以上である。南東コーナー部にキマツが付着している。
- 上軸方向にN-10°Eを示す。柱高は概算で20cmを測る。住居址北側にはピット跡が存在する。
- 3 a住居カマド (第20頁)
- カマドは、北壁面寄壁に沿われ、上軸方向にN-10°Eである。開口部は約43cm、深さ19cmの凹部ピットが設けられている。焼成層は、壁を約60cm、壁外へ約50cm張り込み、壁は焼成部中心に設置されている。焼成部は不明である。
- 3 b住居址 (第21頁、図版7-2)
- 3 bの住居址は、3 aの住居址の北側に位置し、南北2m西側にて3 m住居跡が存在する。基礎は焼成部の大部分は消失しており残存されない。
- 基礎は南北2m20cm以上、東西1m10cm以上である。プランクは明らかではなくキマツが南東コーナー部に付着されている。北壁方向はN-10°Eを示す。柱高は概算で17cmを測る。住居址内からはピット、土盛等が検出されているが、何れもものであるかが明らかではない。
- 3 b住居カマド (第21頁)
- カマドは南壁面寄壁に沿われ、北壁方向はN-118°Eである。焼成部は壁を約80cm、壁外へ約35cm張り込み、開口部から焼成部にかけては、その形状が明確でなく、半壁形のピットが設けられる。焼成部は不明である。



図版7
第3 a・b号住居址

- 3 a住居跡ピット
地上取付
- F1 明成焼成土 (N-10°Eプランク・N-10°E壁を多く含む。焼成層と多少異なる形状がある。)
- F2 赤褐色土 (地上プランク・居住物が多く含む。北側の土によって)
- F3 黒褐色土 (N-10°Eプランクを多く含む。焼成層のプランクが強い。)

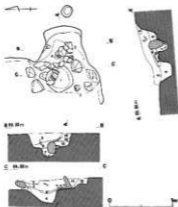


図10 近畿・時田地区の地質

- 多少あり、粗粒なくバラバラしている。)
- 1層 礫層地土 (ロームブロック・炭化物・粘土ブロックを含む、比較的厚に延び)
 - 2層 礫層地土 (粘土ブロックが中に含まれたローム状の層)
 - 3層 礫層地土 (粘土粒・ローム粒を多少含む、粗粒なくバラバラしている)
 - 4層 礫層地土 (粘土ブロックを比較的多く含む、ローム粒・炭化物・粘土粒を多少含む、粗粒が散在している)
 - 5層 礫層地土 (ロームブロックを多量に含む、炭化物も多少含む、1層より厚、粗粒が目立ち、こままっている)
 - 6層 礫層地土 (粘土ブロックが中に散在する、炭化物がやや散在し、1層より粘土状、厚である)
 - 7層 礫層地土 (炭化物・粘土ブロック・粘土ブロック・ロームブロックを含む、1層に比べて、粗より粗粒である)
 - 8層 礫層地土 (粘土ブロックが中に散在し、炭化物・ローム粒を多少含む、やや粗粒あり、こままっている)
 - 9層 礫層地土 (バラバラに散在した礫土)

図11 時田地区の地質の地質

- 1層 礫層地土 (炭化物・粘土粒・ローム粒・粘土ブロックを含む、やや粗粒があり、こままっている)
- 2層 礫層地土 (炭化物・粘土粒・ローム粒・粘土ブロックを含む、1層より粗く、やや粗粒があり、こままっている)
- 3層 礫層地土 (粘土ブロック・粘土ブロック・ローム粒・炭化物を含む、やや粗粒あり、こままっている)
- 4層 礫層地土 (粘土粒・ローム粒・炭化物を多く含む、ロームブロックも多少あり、粗粒なく、バラバラしている)
- 5層 礫層地土 (粘土ブロック・ロームブロックを多量に含む、炭化物も多少含む、粗粒あり、こままっている)
- 6層 礫層地土 (ロームブロックを多く含む、粘土粒を多少含む、粗粒あり、こままっている)
- 7層 礫層地土 (炭化物を多量に含む粘土ブロックも

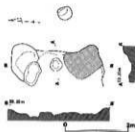


図3 多摩川段丘下部の地層断面

- 1層 砂質粘土 (砂) 層 (多量に存在、炭化物はほとんどない)
- 2層 泥炭層 (ブームアップ・崩壊ブーム層、炭化物が、多量に含む)
- 3層 砂質粘土 (炭化物が若干含まれるがブーム・崩壊層は少ない)
- 4層 砂質粘土 (炭化物が若干含む)
- 5層 粘土 (炭化物が多量に含む、崩壊、炭化物はほとんどない)
- 6層 粘土 (炭化物・崩壊層が若干含む、中程度である)
- 7層 泥炭層 (やや程度である)
- 8層 泥炭層 (崩壊・炭化層は、崩壊層は)
- 9層 泥炭 (炭化物が多量に含む)
- 10層 砂質粘土 (炭化物が若干含む)
- 11層 粘土 (炭化物・崩壊層はほとんどない)
- 12層 粘土 (炭化物・崩壊層はほとんどない、崩壊層の中程度である)
- 13層 粘土 (炭化物が若干含む、崩壊ブームを含む)

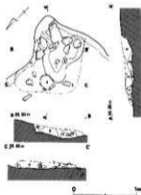
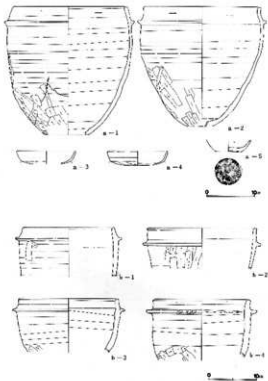


図4 多摩川段丘上部の地層断面



图四四 第3a-3b层仰光柱式土器

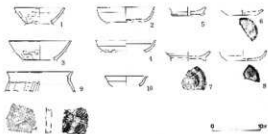


图43 第3号墓出土陶器



図4 a, b, c号住居址 (第20・26号坑図6-1・2)

図4 a, b, c号住居址は、調査坑北西端に位置する。3号の住居址が切り合っているが、新築層は見られずない。

4 a 住 居 1号の住居址は、3号の内で最も西に位置する。遺構部分は掘出してあり、残置されなかった。

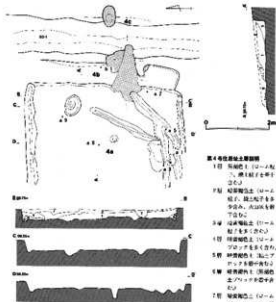


図4号住居址土層説明

- 1層 黒褐色土 (ローマ植子、焼土粒が土中に多い)
 - 2層 暗赤褐色土 (ローマ植子、焼土粒が土中に多い、灰土も若干含む)
 - 3層 暗赤褐色土 (ローマ植子も多く含む)
 - 4層 暗赤褐色土 (ローマ植子も多く含む)
 - 5層 暗赤褐色土 (ローマ植子も多く含む)
 - 6層 暗赤褐色土 (黒褐色土のローマ植子が多い)
 - 7層 暗赤褐色土 (ローマ植子、ローマ植子も多く含む、赤土も多い) (遺構)
- 8層 暗赤褐色土 (土層より薄い、ローマ植子、ローマ植子も多く含む、灰土も若干含む)

第20号

図4a-dの住居

住居址

幅は南北4m30cm、東西3m20cm以上を測り、プランは方形あるいは長方形を呈することが認められる。主軸方位は、N-97°Eを示す。

扉面は、北西的平頭であり、凹面である。扉高は、東端で40cm程度である。

扉扉及び木壁に向う側で、壁溝が検出されている。壁溝の深は、北壁端が20cm程度、南壁端が30cm程度であり、深さはいずれも15cm程度である。

4. e 土カマド 〔第26号〕 同型9-2)

カマドは、東壁南端部に設けられ、主軸方位はN-97°Eである。開口部に平頭な扉面を有し、扉高は約30cm、壁外へ40cm張り出し、壁溝幅は10cm程度は、土の両側がピットが設けられ、カマド構築のための石材がぬかれた痕跡とも考えられる。またカマド東西部から溝が伸びているがその性格は不明である。

4. a 土

第4. e 号の土質は、4. a 号の南側に位置し、カマドを含む東壁と西壁の一部が検出されている。

幅間は、南北4m40cm以上を測り、プランについては明らかでない。主軸方位は、N-97°Eを示す。

扉面は平頭で凹面である。扉高は約8cmを測る。壁溝は、検出されなかった。

4. c 土

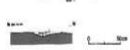
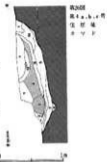
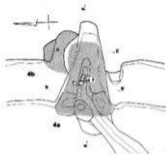
第4. e 号の位置とは、4. e 号の南側よりさらに東壁で検出された。検出されたのは、カマドのみで、扉面は室壁一帯による傾斜を受けており検出できなかった。

4. e 土カマド 〔第26号〕

カマドは、東壁南端に設けられ、主軸方位はN-97°Eである。扉高は壁と約10cm張り出し、壁外へ40cm張り出し、開口部から壁溝部にかけての傾斜は不明であり、扉面は不明である。

第4. c 号住居址カマド土層説明

- 1層 赤褐色土（焼土粒を主とする）
- 2層 黒褐色土（焼土粒とカーン粒子を多く含む）
- 3層 黒褐色土（焼土粒を多く含む、カーン粒子を多く含む）



4a. 多性生殖雌オマツト土層解剖

- 1層 暗褐色土 (糞土アワック、内山田、腐化物を多少含む、粘着がなく、バラバラしている)
- 2層 赤褐色土 (ロームアワック、糞土を多く含む、粘着がなく、バラバラしている)
- 3層 赤褐色土 (ロームアワックを多く含む、腐土層、腐化物、糞土アワック等を多少含む、粘着があり、しまっている)
- 4層 赤褐色土 (腐化物、糞土、ロームアワックが多少混入された粘着性の土層である)
- 5層 灰色土 (糞土、腐化物を多く含む、粘着がなく通っている)
- 6層 淡黄色土 (腐葉を混入)
- 7層 赤褐色土 (糞土、腐化物、ロームアワック、糞土アワックを多く含んだ粘着性腐土)
- 8層 赤褐色土 (いわゆる根の層で、腐化物、糞土を混入する、粘着はなく通っている)
- ※ ユームセクションでは、一部しかみかからないが、オマツト底の小ビット内のものである。
- 9層 灰褐色土 (粘着があり、しまっている、腐葉の多い粘土である)
- 10層 赤褐色土 (アマトローム土層)
- 11層 暗赤褐色土 (活動的腐葉の粘土)
- 12層 暗赤褐色土 (ロームアワックを多量に含む、粘着がない、腐化物、糞土を多少含む、ロームアワック以外の点では土層同化)

- 13層 赤褐色土 (ロームアワック、糞土アワックを多少含む、粘着がなくバラバラしている)
- 14層 暗赤褐色土 (糞土アワック、糞土アワック、腐化物の混入も層で粘着がなくバラバラ)

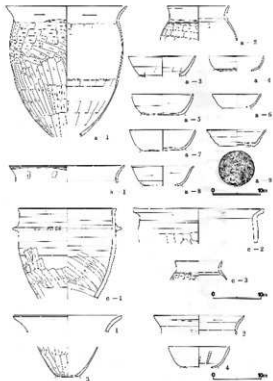


图27 第4a·b·c号任县磁山土器物

第5号住居址 (第29回, 図版9-1-2)

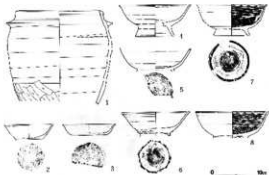
5号住居址は、調査区中央部の埋蔵層上に位置する。住居址の北端には、12号住居址が3m程の所に設けられている。

基礎は、南北2.6m、東西2.7mを回り方型に掘りプランを築いている。土版は、 $N-102^{\circ}$ を示す。

土間は、西に傾斜しており、その北西角は30cm程である。壁高は、西側で15cmを測る。

壁厚は、東壁キマノ竪溝及び、北壁東半に沿う形で検出されている。門穴もど住居址に由来するものか不明である。

カマド キマノは東壁西半部に設けられ、主軸方向は $N-102^{\circ}$ である。燃焼部は壁を厚30cm、壁外へ高さ72cm張り込め、奥より(西)壁には径25cmの円形ピットを掘削し、竈眼の石を配する。土版は燃焼部中央付近に設置されている。



図版9 第5号住居址出土遺物

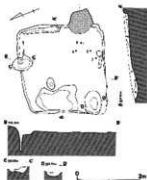


図5 第5世紀前期土曜遺跡

- 1層 砂質粘土 (内側・外周廻り・M・N間の土曜子遺跡)
- 2層 砂質粘土 (1層より外側に遺跡跡・M・N間の土曜子遺跡)
- 3層 砂質粘土 (2層より外側に遺跡跡・遺跡跡・M・N間の土曜子遺跡跡・M・N間の土曜子遺跡跡)
- 4層 砂質粘土 (3層より外側に遺跡跡)
- 5層 砂質粘土 (砂質粘土・M・N間の土曜子遺跡跡)

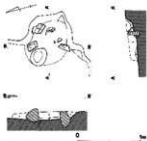


図6 第5世紀前期土曜遺跡

- 1層 砂質粘土 (砂質粘土・M・N間の土曜子遺跡跡)
- 2層 砂質粘土 (砂質粘土・M・N間の土曜子遺跡跡)

図22 第5世紀前期土曜遺跡

第6号住居址(東30・北22・西34・南32, 面積10 1・2)

6号住居址は、調査区中央部の傾斜面上に位置する。北西には、1m程の距離をもって3号住居址がある。

規模は、東西7.5m、南北5.4m程でありプランは、東西に長い長方形を呈している。カマツの左側には、3号住居址と同様に溝り遺しを有し、東西に約5m、南北に2.8mを測る。土柱は、第一階一基を示す。

床面は、西に傾斜しており、北端の40cmを測る。壁高は、東西で25cm、南端で30cm程である。

柱穴は、3基検出されており、例外的な支柱穴である。柱穴は検出されているが、S1とS2が遺石とすれば、S3は、断面上に置かれたと考えられる。

貯蔵穴は、カマツ右側に検出され、規模は、長径1.3m、短径0.8m、深さ0.2mを測る。壁高は、北壁、南壁及び西壁に見られ、さらに、北西コーナー部から住居址外へは2m及びあり、排水溝と考えられる。

周土土層は、カマツ右側の貯蔵穴付近に薄くして見られ、完形品が多い。住居址周土中に炭化物が多く見られることから焼土層であることが想定でき、出土遺物の多くは、焼土を留めたものとする事ができる。

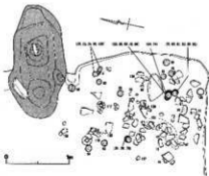


図300 第6号住居址遺址(遺物分布図(遺物集中地区))

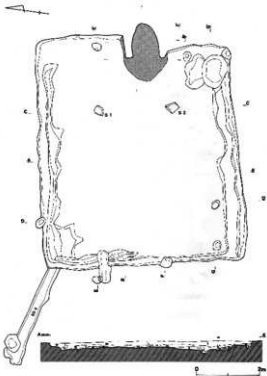


图117 第6号遗址

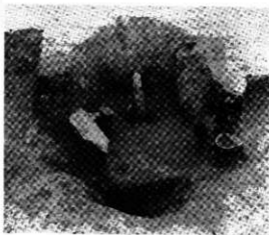


第三次図 第4号住居地層断面図

第4号住居地層断面説明

- 1層 表層赤土（黒土粒、炭化物粒を多量含む）
- 2層 表層赤土（黒土粒、炭化物粒を多量含む、1層より厚まりやや粘り気がある）
- 3層 表層赤土（赤土粒、炭化物粒を多量含む、やや粘り気がある）
- 4層 灰白土（炭化物を多量に含む、焼瓦である）
- 5層 表層赤土
- 6層 特殊赤土（黒土コアックを多く含む、やや粘り気がある）
- 7層 特殊赤土（コアックを多く含む、焼（物）を多く含む）
- 8層 特殊赤土（コアックを多く含む）
- 9層 特殊赤土（コアックを多く含む）
- 10層 特殊赤土（黒土コアックを多く含む、炭化物を多く含む）
- 11層 特殊赤土（黒土粒を多く含む）
- 12層 特殊赤土（焼（物）、炭化物を多く含む）

- 13層 赤褐色土 (黄土粒を多く含む、腐化が中々)
- 14層 黒褐色土 (黄土粒、腐化動物を多く含む、腐化が非常に深い)
- 15層 赤褐色土 (黄土を多く含む、腐化が非常に深い)
- 16層 暗黒腐植土 (腐土プロットを含む、腐土粒を若干含む)
- 17層 暗黒腐植土 (腐土プロットを多く含む)
- 18層 暗黒腐植土 (腐土プロットを多く含む)
- 19層 暗黒腐植土 (腐土、腐化物を多く含む)
- 20層 暗黒腐植土 (腐化動物プロットを含む、やや腐化が深い)
- 21層 暗黒腐植土 (腐土プロットを含む、腐化動物を若干含む)
- 22層 赤褐色土 (腐土粒を若干含む)
- 23層 暗黒腐植土 (腐土粒を多量に含む、腐化動物、腐土粒を若干含む)
- 24層 暗黒腐植土 (腐化動物プロット、腐土プロットを若干含む)
- 25層 赤褐色土 (腐化物を多量に含む)
- 26層 暗黒腐植土 (腐土粒、腐化動物を若干含む)
- 27層 暗黒腐植土 (腐土プロット、腐化動物を多量に含む)



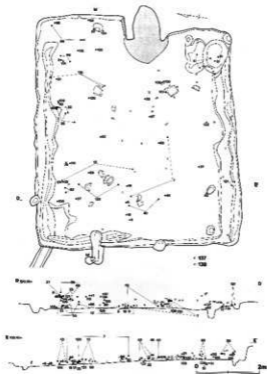


图25 藜科植物叶上元素分布图

西マア
 西マアは遺構中央部に設けられ、土軸方向は 74° 位である。西側部に壁倉
 (西44区) 壁倉へ高さ130cm斜り込み、開口部には、内40cm深さ20cmのポストを設
 ける。柱は間中丈約30cm、高約30cm斜り出し、その上に地味色の粘土が貼ら
 れる。支脚は西側部東端に設置され、両側の粘土により固定される。用途等は不明
 である。

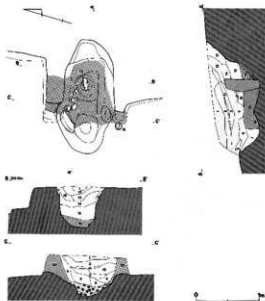
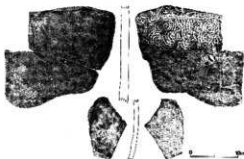


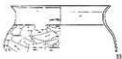
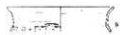
図44 西44区住居西マア

第6号採集地から得た土層説明

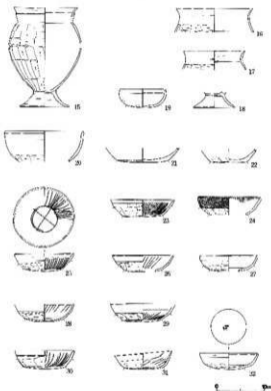
- 1号 砂質粘土（灰砂質、黄土、粘土、炭化物を含む層で、しまっている）
- 2号 砂質粘土（黄土ブロックが多く含む、炭化物を多少含む、やや粘質がある土層である）
- 3号 砂質粘土（炭化物の小ブロックを多く含む、黄土粘土ブロックを含む、粘質があり、しまっている）
- 4号 砂質粘土（炭化物、黄土ブロックを多少含む、粘土ブロックも多少含む、粘質より粘質がなく、やや砕けている）
- 5号 砂質土（粘土層であり、黄土を多少含む）
- 6号 砂質粘土（炭化物と炭化層とを多少含む黄土を多少含む粘質なくやや砕けている）
- 7号 砂質粘土（砂を多量とし、アール質、ロームブロックを多く含む、粘質がなくやや砕けている）
- 8号 砂質粘土（砂とを多量とする土層で炭化物、黄土を含む、粘質があり、しまっている）
- 9号 砂質粘土（黄土を多量に含む、炭化物も多少含む、やや粘質があり、しまっている）
- 10号 砂質粘土（黄土、炭化物の小ブロックを多く含む、比較的粘土質の土層で、ややしまっている）
- 11号 砂質粘土（炭化物を多く含む層で、黄土を多少含む、やや粘質がある、しまっている）
- 12号 砂質粘土（砂質の粘土層）
- 13号 砂質粘土（黄土、炭化物の小ブロックを多少含む、やや粘質がある、しまっている）
- 14号 砂質粘土（黄土ブロックを多量に含む、炭化物も多少含む、粘質があり、しまっている）
- 15号 砂質粘土（黄土、炭化物、ロームを含む、炭化層の多く含む、やや粘質があり、砕けている）
- 16号 粘土質黄土（黄土層で、粘質があり、堅くない）
- 17号 砂質粘土（細い黄土ブロックを多く含む炭化物を多少含む、粘質がなく、しまっている）
- 18号 砂質粘土（黄土の小ブロックを少量含む粘土層）
- 19号 砂質粘土（黄土ブロックを多量に含む、粘質なく、しまりが少ない）
- 20号 砂質粘土（炭化物、黄土、ロームを少量含む、粘質があり、しまっている）



第32図 第6号採集地土七層を順次型定した土層切片の概図



Будя С. И. Иллюстрация 1



图六四 卷六分位彩陶土器群(2)

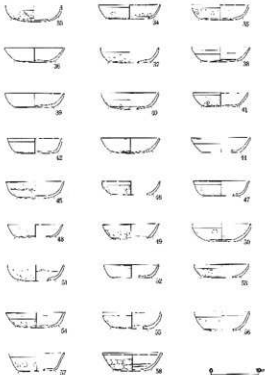
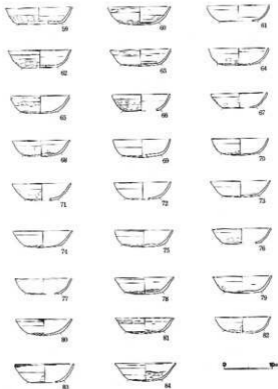


图365 第6方窖山丘出土青铜器(3)



圖四四 第六期古銅器出土遺物(4)

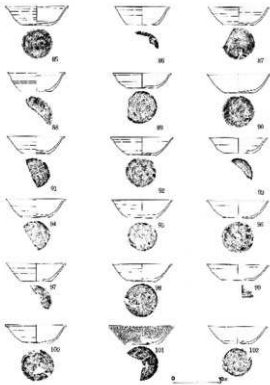


图400 湖南长沙出土器物(5)

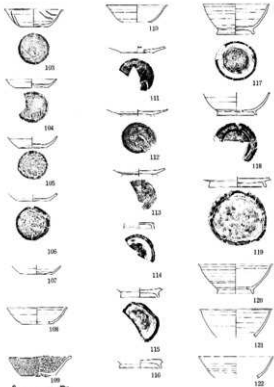


图419 第4千纪拉杜区土器(6)

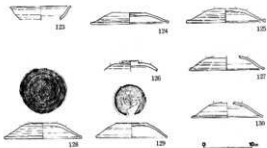


图425 第六世纪前期出土器物(7)

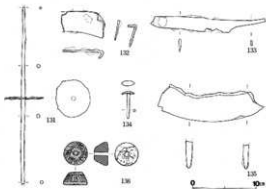


图426 第六世纪前期出土器物(8)

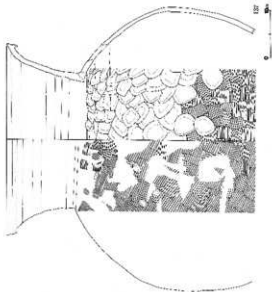


图106 德石神祠遗址出土的圆形大型石窖(1)

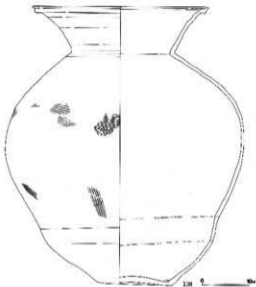


圖45 高平神農架址出土黑彩陶大瓶口(圖2)



圖46
高平神農架址出土
黑彩陶大型瓶口遺殘片

第7号住居址（第48・49図 図版13-1・2）

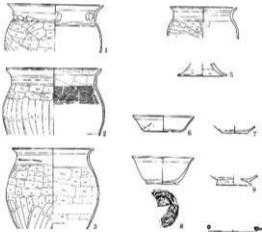
7号住居址は、調査区西端の斜面上に位置する。西側境界は、流れており検出されない。

規模は、南北2.8mを測り、プランは方形を呈している。主軸は、N-82°-Eを示す。

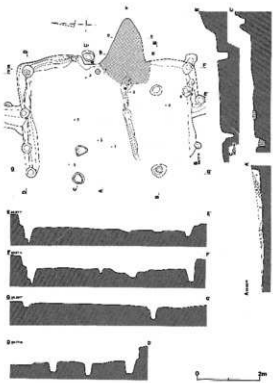
東面は、西に傾斜しており20m以上の北高差を測る。壁高は東側で25mを測る。土柱穴は3基検出されており、東面からの深さは、20-40cmを測る。東面北西隅ピット内から検出された石及びその60cm東から検出された石は、礎石となることが考えられる。支柱穴は壁にそう形で検出されている。

壁溝は、東壁カマドを例及び止壁に於いて検出されている。

カマド カマドは、東壁中央部に設けられ、主軸方向は、N-82°-Eである。燃焼部は（第48図、26壁を幅105cm、壁外へ長と10cm張り込み、焚き口部付近は径55cm深さ5cmのピット）を設け、さらに浅い溝が検出する。



第47図 第7号住居址出土遺物



PLAN ET SECTION



図24



図25



図26

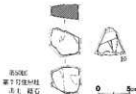
魚の付位深法
の使方



図27

魚の付位深法の方針と組織説明

- 1層 脳膜の上・脳上層と多量に存在し、固定液中の中心部、固定液中散在し、片状に多量に存在する。
- 2層 脳膜の上・脳上層の入り目部分に1層より中心部散在し、固定液中散在し、片状に多量に存在する。
- 3層 脳膜の上・脳上層より、固定液、固定液散在する。
- 4層 脳膜の上・脳上層より固定液、固定液散在する。
- 5層 脳膜の上・脳上層・固定液散在する。
- 6層 脳膜の上・脳上層、固定液散在する。
- 7層 脳膜の上・脳上層より、固定液、固定液散在する。
- 8層 脳膜の上・脳上層、固定液散在する。
- 9層 脳膜の上・脳上層より固定液・固定液散在する。
- 10層 脳膜の上・脳上層散在し、固定液散在する。
- 11層 脳膜の上・脳上層と多量に存在し、固定液散在する。
- 12層 脳上層より、固定液散在する。
- 13層 脳上層より、固定液散在する。
- 14層 脳上層より、固定液散在する。
- 15層 脳膜の上・脳上層、固定液散在する。
- 16層 脳膜の上・脳上層散在する。
- 17層 脳膜の上・脳上層散在する。
- 18層 脳膜の上・脳上層散在する。
- 19層 脳膜の上・脳上層散在する。
- 20層 脳膜の上・脳上層散在する。
- 21層 脳膜の上・脳上層と多量に存在し、固定液散在する。
- 22層 脳膜の上・脳上層と多量に存在し、固定液散在する。
- 23層 脳膜の上・脳上層と多量に存在し、固定液散在する。



第1号住居跡出土遺物

- 1層 粘板瓦片（直線型）と平片（中心、線画）
- 2層 粘板瓦片（線画）
- 3層 漆器土（カークスツープ）と磁器土
- 4層 粘板瓦片（線画）とカークスツープ（カークスツープの磁器土）
- 5層 漆器土（カークスツープ）とカークスツープ（カークスツープの磁器土）（線画）

第3号住居跡（第2次跡、図版10-1・2）

第3号住居跡は、調査区中央部西側の埋藏画の上に位置する。南壁には、1号住居跡が2mと連続している。

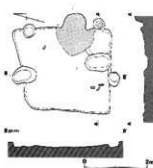
明幅は、片方壁直線2.7m、半直2.1mを成る。プランは、東端のやや幅狭の部分を呈している。土物は、文一郎一式のもの。

北壁は、中央部が若干低く、全体的に西に傾斜し、北西角1.6mを成る。壁高は、東壁側で2.6m程である。

土柱穴は検出されないが、実径6cmと見られるゲットが、東壁上に於いて5基検出されており、図きはそれぞれ2.5m程である。



図版11 第3号住居跡出土遺物

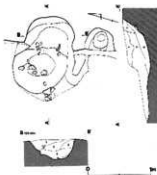


方マド(図10-2) (図版10-2)

マドは北壁南側に設けられ、北壁方面は、 5×0.7 米である。西壁部は壁を築いた壁かへ長さ 2.5 米ほど延び、其の口部付近は、若干開けられている。壁は壁を長さ 2.5 米程取り出したものが内側のみに残存する。西壁部は不明である。

第3号住居址土層説明

- 1層 緑褐色土 (粘土)
- 2層 暗褐色土 (粘土、焼土粒子を若干含む)
- 3層 暗褐色土 (粘土、焼土粒、白土質土ブロックを多く含む、土層より硬い)
- 4層 緑褐色土
- 5層 暗褐色土 (ロームブロックを多く含む、石灰層)
- 6層 暗褐色土 (スクリヤ、焼土粒を若干含む)
- 7層 河原山のA層石



第3号住居址方マド土層説明

- 1層 赤褐色土 (焼土ブロック (小) を含む、ロームブロック (小)、丸石を多く含む)
- 2層 暗褐色土 (粘土、焼土ブロック (小)、石灰物 (小) を若干含む)
- 3層 赤褐色土 (焼土ブロック (大) を多く含む、焼土層と同じ)
- 4層 暗褐色土 (焼土ブロック (大)、ロームブロック (小) を多く含む、石灰物を若干含む)
- 5層 暗褐色土 (焼土層より硬い)

第10図 第3号住居址および方マド

第9号住居址 (第53・54図, 30版15—1・2)

本住居址は、調査区南東部に位置する。南北は東西約1m、東西4.8mを測る。プランは、東側に長い長方形を以てしている。キマドの位置には80cm程の掘り出し部を有する。基礎はカークーネを示す。

床間は、比較的平準である。壁間は、北壁で80cm厚弱で20cmを測る。柱穴は、3基焼成された径は20—25cmを測る。

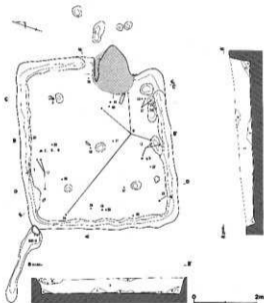


図53 第9号住居址

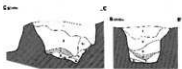
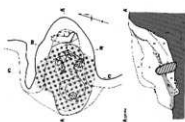
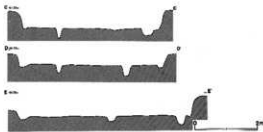


図546 第3号の化石標本(正)の複製

壁面はカマド部分以外で全周し北西コーナー部から60cmと同様な溝が外方に2.0m程のびている。

カマド (北5次、図 版15-2)

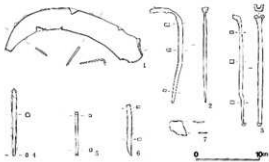
カマドは、東壁面中部に設けられ、主軸方向は、N-10°Eである。燃焼部は壁を幅160cm壁戸へ高さ104cm張り込む。焚き口部付近には、径40cm、深さ7cmのピットが設けられる。北端は壁を70cm程袖状に張り残しており壁端に縁田がある部分に、完全に壁を張り残しているため、軸は認められない。位置は燃焼部中央に設置される。

調査号住居地土層説明

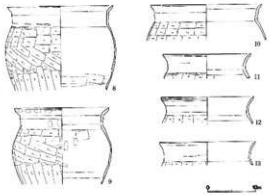
- 1層 暗褐色粘土（粘質）
- 2層 黒褐色土（ローム粒子・炭化物・炭土を若干含む）
- 3層 暗赤褐色土（ロームブロック・焼土粒子・炭化物をやや多く含む）
- 4層 赤褐色土
- 5層 暗赤褐色土（粘質）
- 6層 暗赤褐色土（灰褐色の焼土ブロックを多く含む）
- 7層 灰褐色粘土
- 8層 暗赤褐色土（3層より明るい）

調査号住居地カマド土層説明

- 1層 黒褐色土（大きいロームブロックや小さい焼土ブロックを若干含む大山河をやや多く含む）
- 2層 赤褐色土（1層より明るい、小さいロームブロック・小さい焼土ブロック・炭化物を比較的多く含む、大山河を僅かに含む）
- 3層 暗赤褐色土（粘土、小さな灰褐色焼土ブロックを若干含む）
- 4層 灰褐色土（粘土、小さな焼土ブロックを若干含む）
- 5層 灰褐色土（小さな焼土ブロックを多く含む、炭化物を若干含む）
- 6層 赤褐色土（焼土、小さなロームブロックを若干含む）
- 7層 黒褐色土（小さな焼土ブロックを若干含む）
- 8層 黄褐色土（粘土質）
- 9層 灰褐色土（粘土質層）
- 10層 黄褐色土（大きな、灰褐色焼土ブロックとロームブロックを若干含む）
- 11層 灰褐色土（大きな焼土ブロックを多く含む）
- 12層 赤褐色土（小さな焼土ブロック・炭化物・ローム粒子を若干含む）



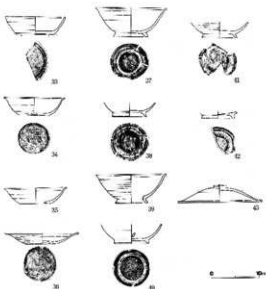
第52圖 漢中竹山戰國出土遺物(1)



第53圖 漢中竹山戰國出土遺物(2)



图 3 殷代 陶器 (A 组 3)



第10号 高野新田河内出土遺物(4)

第10号住居址 (第59・60区、55号17-1・2)

銅製銅器は、調査区の中よりやや西側に散見し、北側には多少位置地が20mの位置にある。

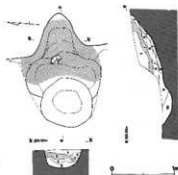
銅鏡は、東西1.2m、南北1.9mを測る。ブロンズは、表面が比較的平滑な面を呈している。直径は5-6寸 程度を示す。

銅鐙は、やや内側に傾斜し、長さ1.5m以上を測る。銅高は、通常で30cm程度あり、表面は検出されていない。

電通は、西側の北半分を除いて、全通している。
 柱穴としては、電柱穴が多数掘られている。深さは約100cmを隔る。支柱穴は、電通上に於いて掘削されている。

カマド
 (第5区、
 図版17-2)

カマドは竪穴式で掘削され、回転方向は南-70°Eである。竪穴部は横を60cm、奥へ長を25cm程度伸ばした。奥へは扉付の扉は両面を若干開くばあ、さらに、径10cm深さ25cmの円形のダクトが設けられる。竪穴部は不明である。



第5区
 竪穴式カマド

第10号住居地土層説明

- 1層 沖積褐色土
- 2層 黒褐色土 (黒褐色土とアロップ、炭土粒子、炭化物を若干含む)
- 3層 黒褐色土 (黒褐色土と茶褐色土の混合土、炭土粒子を多く含む)
- 4層 暗茶褐色土 (ロームアロップを若干含む、炭土粒子を多く含む)
- 5層 黒褐色土 (炭土粒子を若干含む)
- 6層 暗茶褐色土 (スチリア、炭土を多く含む)
- 7層 暗茶褐色土 (ローム地、炭土を少量含む)
- 8層 暗茶褐色土 (7層に比べ、色調がやや暗い)

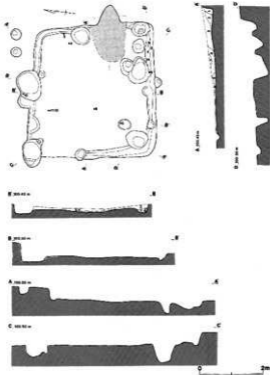


圖608 圖10中1號柱

図14 特殊遺物のヤマト土器説明

- 1 罎 赤褐色土、口縁部を多く含む、横土のフック、底は厚く底平なり。
- 2 罎 赤褐色土、口縁部
- 3 罎 赤褐色土、横土のフックを多く含む。
- 4 罎 赤褐色土、口縁部
- 5 罎 赤褐色土、横土のフックを多く含む、底は厚く底平なり。
- 6 罎 赤褐色土、口縁部を横土のフック、横土のフックを多く含み、口縁部を底平なり。
- 7 罎 赤褐色土、口縁部を横土のフック
- 8 罎 赤褐色土、口縁部を横土のフックを多く含む。
- 9 罎 赤褐色土、口縁部を横土のフックを多く含む、横土、底は厚く底平なり。
- 10 罎 赤褐色土、口縁部を横土のフックを多く含む、横土、底は厚く底平なり。
- 11 罎 赤褐色土、横土のフック、口縁部を横土のフックを多く含む、底は厚く底平なり。

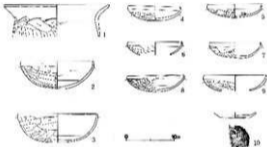


図14 特殊形土器断面（式例1）



図15 特殊形土器断面（式例2）

第11a・11b・11c号住居址 (第63・64号, 図版19-1・2)

11号住居址は、東倉以南西馬に於いて掘削されている。11-a, b, c号住居址の3軒の並び合いであり、南は堀道は、11号住より11-a住が狭いことが明らかである。

11-a号住居址の幅は、東西、南北ともに3m以上である。遺物は第一級〜Eを示す。

11-b号住居址は、南北3.5m以上であり、2軒は第一級〜Eを示す。

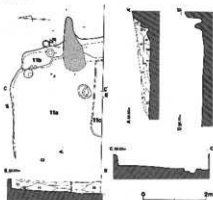
11-c号住居址は、東西は3m程の幅をもつ。

広さは何れも不明であり、特に、11-a号住居址が東壁で60cm、11-b号住居址が東壁で80cm、11-c号住居址が北壁で50cmである。

壁道は何れも掘削されておらず、またビートも、どの位置に落ちたか明らかでない。

カマド
(第64号, 図
版19-2)

11号住居址の並び合いが確認されたがカマドは新しい11-a号住居址のものである。東壁中心に設けられ、西側壁は北壁を距り20cm、南70cm、壁戸へ長さ40cm張り込み、これに約30cm広さ70cmの煙道部を付設する。灰を口部は平均の灰道を利用する。



第63号 第11a・b・c号住居址

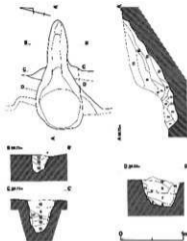


図11 第11号住居跡
の平面図

図11号住居跡土層説明

- 1層 築居跡土 (土間) になっている。ローム磁器や中世貨幣、陶の破片が散見する。
- 2層 築居跡土 (土間) になっている。ローム磁器が散見する。
- 3層 築居跡土 (土間) になっている。ローム磁器や中世貨幣。
- 4層 築居跡土 (土間) になっている。ローム磁器・炭化物層や中世貨幣。
- 5層 築居跡土 (土間) になっている。瓦の破片や中世貨幣、やが焼土の層が散見している。
- 6層 ローム層。
- 7層 築居跡土 (土間) になっている。ローム磁器や中世貨幣、土器片が散見する。
- 8層 築居跡土 (土間) になっている。陶の破片や中世貨幣、土器片が散見する。
- 9層 築居跡土 (土間) になっている。瓦の破片が散見する。土器片も散見する。
- 10層 築居跡土 (土間) になっている。
- 11層 築居跡土 (土間) になっている。ローム磁器を散見し、瓦の破片・炭化物層と中世貨幣が散見する。
- 12層 築居跡土 (土間) になっている。ローム磁器が散見する。
- 13層 築居跡土 (土間) になっている。ローム磁器・炭化物・瓦の破片が散見する。
- 14層 築居跡土 (土間) になっている。ローム磁器や中世貨幣。

圖11号住居地カマド土遺物類

- 1層 灰土色土（焼土粒子を中や含む、あまりしぼってみらずに付いている）
- 2層 灰土褐色土（ほんの少し焼土粒子を含む、ローム粒子を中や含む、焼くしぼっている）
- 3層 赤褐色土（焼土）
- 4層 灰土褐色土（ほんの少し焼土粒子を含むが量よりも少ない、ローム粒子を中や含む、焼くしぼっている）
- 5層 赤褐色土（焼土）
- 6層 灰土色土（焼土粒子を含む、灰化物を含む）
- 7層 灰土褐色土（焼土があり、しぼっている）
- 8層 灰土色土（ほんよりしぼっている、ローム粒子を中や含む）
- 9層 灰土褐色土（中や焼土である、灰化物を中や含む、ローム粒子を中や含む）
- 10層 灰土褐色土（焼土・灰化物を少量に多く含む）
- 11層 灰土色土（焼土）
- 12層 灰土褐色土（焼土）
- 13層 灰土褐色土（ほんより焼土あり、焼くしぼっている、灰化物・焼土・ローム粒子を中や含む）
- 14層 灰土褐色土（しぼっていない、ローム粒子を多く含む）
- 15層 灰土褐色土（ほんより焼土あり、灰化物のほんの少し焼土を含む）
- 16層 灰土色土（焼土と灰化物の層、10層よりも焼土多く、13層・14層よりも焼土少）
- 17層 灰土褐色土（かなりローム粒子が混ざっている、あまり焼くない）



圖11 圖11号住居地赤土遺物類

圖12号住居址（第68区 図版20-1・2）

12号住居址は、南壁は中央より北寄りに位置し、長さmには多量住居址がある。住居址は、西側の多くが消失しており、カマド付近のみ残存されている。

壁構は、東西2.6mを測り、ブツは方形あるいは長方形を呈すと考えられる。主軸は、N-100°Eを測す。

東壁は、比較的平直であり、壁高は、東壁で2.5mを測る。西側に傾出されず、またピットについても住居址に併存するものであるかどうか不明な点が多い。

カマドは、東壁中央部に設けられ、主軸方向はN-100°Eである。熱室部は壁を幅27cm壁外へ長さ47cm張り込む。壁を以て対称には浅い平盤形のピットが設けられる。主軸は熱室部中央よりやや北よりに設置される。

（住居地・第68区、カマド・長谷川氏）

カマド
（第68区、
図版20-2）

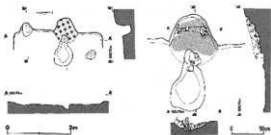


図65 馬場川層群の上部の地層相関

馬場川層群の地層相関

- 1層 赤褐色土 (礫土状・炭化植物を多量に含み、カーン粒を多数に含み、中々層の上部である)
- 2層 黄褐色土 (礫土状を多量に含み、炭化植物を多量に含み、粘土状)
- 3層 砂土
- 4層 赤褐色土 (礫土状・炭化植物を多量に含み、カーン粒を多量に含み)
- 5層 赤褐色土 (礫土状・炭化植物を多量に含み、カーン粒を多量に含み)
- 6層 黄褐色土 (カーンゴロウ)



図66 馬場川層群の下部の地層相関



図67 馬場川層群の下部の地層相関



Figure 17 - 17, 17, 17, 17, 17

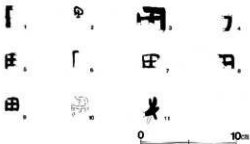
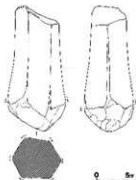


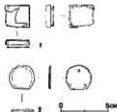
图2(续) 阿加铁路A地区土壤分布图(续)

编号	经纬度、高程	土壤名称	成因、部位	母质	基本理化性	土质	面积(亩)
1	东经108° 36.1	黄红壤(红壤)层	土质壤性 坡地	砂岩	内 含 腐 殖 质	粘 土	2
2	东经108° 36.2	" "	土质壤性 坡地	砂岩	内 含 腐 殖 质	粘 土	15
3	东经108° 36.3	" "	土质壤性 坡地	砂岩	内 含 腐 殖 质	粘 土	15
4	东经108° 36.4	" "	" "	" "	内 含 腐 殖 质	粘 土	5
5	东经108° 36.5	" "	土质壤性 坡地	" "	内 含 腐 殖 质	粘 土	2
6	东经108° 36.6	黄红壤	土质壤性 坡地	" "	内 含 腐 殖 质	粘 土	20
7	东经108° 36.7	黄红壤	" "	" "	" "	粘 土	5
8	东经108° 36.8	" "	" "	" "	内 含 腐 殖 质(1) 腐 殖 质(2)	粘 土	15
9	东经108° 36.9	" "	" "	" "	内 含 腐 殖 质(1) 腐 殖 质(2)	粘 土	15
10	东经108° 36.0	" "	" "	" "	内 含 腐 殖 质	粘 土	20
11	东经108° 36.1	" "	黄红壤(1) 黄壤	" "	内 含 腐 殖 质	粘 土	15
12	——	" "	土质壤性 坡地	" "	内 含 腐 殖 质	粘 土	5
13	——	" "	" "	" "	" "	粘 土	15
14	东经108° 36.20	黄红壤	土质壤性 坡地	砂岩	内 含 腐 殖 质	粘 土	15
15	东经108° 36.25	黄红壤	" "	砂岩	内 含 腐 殖 质(1) 腐 殖 质(2)	粘 土	15
16	东经108° 36.30	" "	" "	砂岩	内 含 腐 殖 质	粘 土	15
17	东经108° 36.35	" "	" "	" "	" "	粘 土	15
18	东经108° 36.40	黄红壤	黄红壤(1) 黄壤	砂岩	" "	粘 土	15
19	东经108° 36.45	" "	" "	" "	" "	粘 土	15
20	东经108° 36.50	黄红壤	黄红壤(1) 黄壤	砂岩	内 含 腐 殖 质(1) 腐 殖 质(2)	粘 土	15
21	东经108° 36.55	黄红壤(1) 黄壤	土质壤性 坡地	砂岩	内 含 腐 殖 质	粘 土	15
22	——	" "	土质壤性 坡地	砂岩	内 含 腐 殖 质	粘 土	15

图3(续) 阿加铁路A地区土壤类型图(续)



第1号 第1号柱の断面図 (単位: 5m)



第2号 柱の断面図 (単位: 5m)

- 1. 断面図
- 2. 断面図
- 3. 断面図

第2節 掘立柱建物遺構、ピット群、土坑、溝

(1) 掘立柱建物遺構

第1号掘立柱建物遺構 (第73号)

本柱は約10m四方及び掘立柱部の柱間が約2mであるが、掘立柱部、遺構上部でのピットの並び方から東西2間×南北3間の土坑建物に思われる。遺物はヤーキー一帯にとり、掘立柱部は約2m四方、ピットの柱間約2mを測る。遺構中央部のピットより調査区画(第73号)が突出している。

第2号掘立柱建物遺構 (第73号)

本柱は東西1間×南北1間又は1間以上の規模を有する。柱間は約2mを測る。方位はヤーキー一帯を示す。断面1の1部と重複する。北西側のピット内より土坑部と調査区画(第73号)が出土している。又そのすぐ南より鉄製品(第73号)が出土しており本柱及び調査区画との関連が考えられる。

第3号掘立柱建物遺構 (第73号)

本柱は東西1間×南北1間又は1間以上の規模を有する。柱間は約2mを測る。方位はヤーキー一帯を示す。断面の小ピットで構成される。各ピットの2間の幅間は約1.0-1.8.1mを測り、遺構弱く残っている。

第4号掘立柱建物遺構 (第73号)

本柱は東西2間×南北1間又は2間以上の規模を有する。掘立柱部は約2m四方

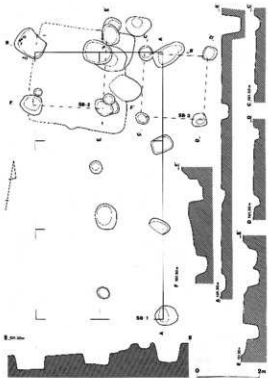


图32 图1、2、3为坑位结构剖面图(5号—1、2、3)

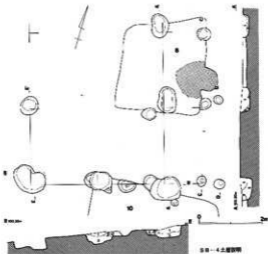
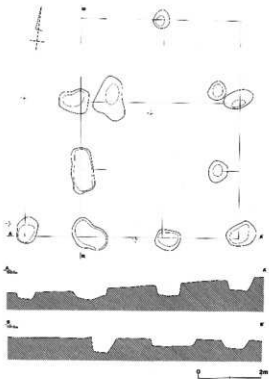


図4-4 土層説明

- | | |
|--|--|
| | <p>1層 埋蔵土 (ホームブ
ック、溝、瓦等
物を含む)</p> |
| | <p>2層 埋蔵土 (ホーム
ブ、溝上、埋蔵物
含む)</p> |
| | <p>3層 埋蔵土 (ホームブ
ックの上部、瓦等
物を含む)</p> |
| | <p>4層 埋蔵土 (ホームブ
ックの下部、瓦等
物を含む)</p> |

図4-4 土層説明 (図4-4)



第73号 第5号遗址的遗址平面图(比例—3)

m、並行の距離は約2m 10m、1m 20mを隔る。資料は下—1の層を成す。並行北側の柱列は不明瞭である。

第5号縄文柱礎物遺蹟（第75式）

本式は南北2段×東西2段又は2段以上の配置を有する。並行の柱間は約2m 10m—2m 40m、並行の柱間は約2m 40m—2m 60mを隔る。遺物は層—7—1層を成す。並行北側の柱列は不明瞭である。

(2) ビット跡

ビット跡—1（第76式）

本跡は構成するビットの位置関係は何らかの配列の存在を暗示しているが、遺物遺構として捉え得るまでに至らなかったものである。

ビット跡—2（第77・78式）

本跡の遺物には第3・7号配列跡が存在する。柱礎跡に伴う柱穴が多数内に含まれているか否かは明らかでない。各ビットのプランには、ばらつきがみられる。

ビット跡—3

本跡は第3、7号位置配列跡に存在するものである。複数の小・小ビットにより構成される。位置跡に伴うビットが含まれているかどうかは明らかでない。

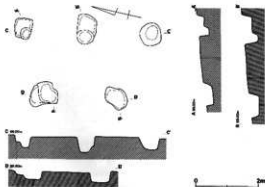


図76式—ビット跡—1

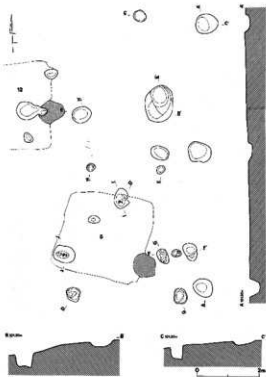
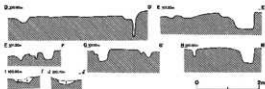


圖 100 大正 10 年—2111



第79図 ピット跡-2(2)

ピット跡-3土層説明

P-1

- 1層 黒褐色土 (カームズリックを若干含み、火土灰多量に含む)
- 2層 黒褐色土 (カームズリックを若干含む)

P-2

- 1層 黒褐色土 (カームズリックを若干含み、粘土質の土を若干含む)

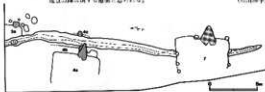
③ 土 地 (図80図 - 図4表)

図4表 第1～4号土城跡調査

No.	規模(m)	深さ(m)	No.	規模(m)	深さ(m)
1	84×93	16	4	143×100	14
2	140×92	22	5	84×90	25
3	124×84	20	6	102×70	20

④ 遺 (第79図)

第1号遺は埋土全体に焼土、灰土を含有し、部分的には割罫も認められる。焼土は隣に属する遺構と認められる。(図804号)



第80図 遺1付図(1)-1

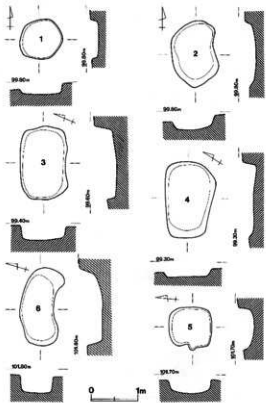


FIGURE 1-5 (2015-1-5)

第1章 阿知越遺跡の提起する問題

大型住居址

本遺跡から発見された大型住居址の規模を比較するために、平野原遺跡の想定で
きた了野の住居跡を同一図上に並べたものが図42である。これによると本遺
跡で確認された住居址の中でも最も規模が粗大な第1号住居址は既に築かれた規模
をもち、更に阿知越遺跡南遺点（図41図1）や舞鶴下遺跡（調査、1977）等の遺
跡の住居址と比較した場合においてもその規模は極めて粗大であるといえる。

これらの住居址は、同一図記号のぬぐも異なる住居址や、一部に礎石を有する
他の住居址と並ぶや特徴を顕著をとるとともに、上部の出土量の点においても他
に類似していることが解る（図43）。また、第2号住居址や第3号住居址では、
竪穴式土壇（土色土壇）の存在や鉄製品の出土量においても他の住居址よりも
多い傾向が認められ、舞鶴南遺点においてはこの二軒だけには存在するなど、単に形
式の別種人員の多様に由来するのではない差異を示している。更に注目すべきことは、
大規模なものと見られる第1号住居址では、掘りだされて海溝状になった土壇
や多量の灰化土とともに土壇の周囲した網の小輪が認められている。これは本住居
址から出土した網網の大輪盤をもち、

第1号住居址（図41-1）の柱穴位
置から出土した瓦片を考慮する
とき、あるいは調査員長の説明に
よるものであることも考えられる
よう。ともあれ、これらの事例に
関係する人物は、下級官人層に
属する者であったことも予想す
るものであろう。このようにこ
れらの住居址は、他の住居址と
同一の竪穴式土壇という形式を
もちながら、その規模や特徴の
顕著な点において常に卓越して
おり、丸居時代には国内にこの
ような断崖が形成されていたこ
とは注目すべきであろう。また、
以上のような築居内における
副葬品の置入とともに、本宮志
大久保山ノ遺跡の遺文（図44
表、1978）において副葬が認め
られているような築居内遺跡の
同層位にも変化が起こったこと
が予想される。

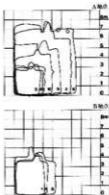


図42 阿知越遺跡と了野遺跡の比較

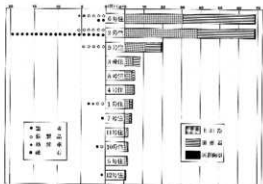


図2 第1住居型別遺物出土状況断面図（注）

共同居住地の 想定

ここでは、本遺跡周辺の共同居住地としての山野の区域を想定するために、まず該地の周辺地域の調査の状態を想定したい。本地域の開発の状況を知る手がかりのひとつに奈良が郡制があり（注1）、本郡北之國に広がる女塚山の神域地には大宮にその参りの御殿をみてとることができる。また本遺跡を定めた女塚山神域地と同む丘陵部には集落が古く存在しているのが、穀物であることから、これらの区域が居住区域として利用されることが多かったことが想定される。この他に集落が定まったと考えられる拠点には本郡庁の自然集落土があり、本神楽丘陵やそれ以南の小川（海部川）の氾濫地を中心とする広い区域には遺跡地は稀少である。特に山野の丘陵以南の区域は、著しく中山川の氾濫によってもたらされた耕植地の崩壊する途次の多い荒廢の傾斜しい区域であったと考えられ、共同の居住地としての発地や発祥が問われていたと推定される。注目すべきことは、この山野の丘陵とそれ以南の区域は、古墳時代の前期には延智山古墳群や瓦山古墳・大久保古墳群が形成され、領域として利用されていた地域を中心としていることである。福徳元年（798年）の地方官界によると「加賀成州、以賀町以下、當地野地には田圃がなく大畠が認められている。本遺跡周辺の古畠が、ここにいる集落に相当するものかどうかに検討を要するが（注2）、少なくとも7世紀後半頃まで古墳が形成され、その後集落形成を伴ったと考えられるところから、該

区域には勢力を振り回った場としての宗教的意識が強く残存していたとみて差しつかえない。このような區域としての古墳群の存在する区域は、中興及び万葉時代の場として文化的に内容をめられたがらも民間の祭祀場として設定されていた区域であり、公制支配化で内容を空しく時期を末葉期の部分ではなかった（図3）。この遺跡場の民間祭祀場である「祭祀的に民間性が強い・維持してきた場については、国家権力が直接その場を扱うことなく、そのまゝ民間性全体に内容を認める」（丸山、1997）ものであるといわれている。これが事実とすれば、これらの区域は内容が形成された民間性による強制的な祭祀場が認められることを意味している。

**民間性による
占拠**

戸田万寿は、旧野に関わる在野臣民の意識を考察した種説として、少なくとも九世紀代には「臣民の親元神・守護神とされた地主等の所帯である」という觀念の存在をあげながら、田野もこのような地主神の存在とすることについて、田野に対する「村部の水取付・潜在的な共同体的教育を宗教的に展開して表現するものに所帯をない（戸田、1997）」としている。水運域における古墳群を中心とした区域は、このような水運域に配られるべき親元神等の祭祀的觀念をもとめて、古墳群全体としての民間性的な占拠が意識されていたことに懸念がたかくない。以上のことから民間祭祀場やそれ以降の小山川流域を中心とする区域は、そこに所在する古墳群の祭祀主体としての民間性の祭祀場として占拠されていたことが推察されよう。

**民間祭祀場
内の開発**

しかし、生野山と大下河川流域に築かれた区域にも九世紀末—十世紀代には、湯水点を中心とした集落（図2回—g）が形成されたため、また小山川と大久保河川流域に築かれた集落にも集落（図3回—b）が形成されることは、前述の民間祭祀場としての場にも、ある種の発展と、空振り取が過ぎたことをも表している。このように、中興期の開発を促した大が土族の出現する九世紀代の末には、分りづつであるが民間性の意識が弱まり、中代式土で形成の集落が優勢されていたのである。

以上、ここに中興期から導かれる幾つかの問題を提起したが、これらを含めた本書の欠は、「野原製鉄所Ⅱ」の報告中で補をいいたいと考えている。（図本編後）

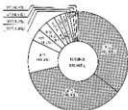


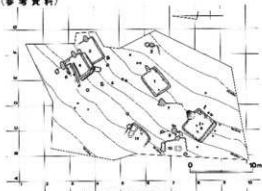
図3回 民間祭祀場内外人口比較点注

- 注1. 奥平郡史跡をたどりて内河に遺るものとするとはできない。しかし、寛文町史跡遺跡（跡本、西口、1981）や、寛文町井根地区の調査等では、奥平の遺跡の認められる地点に縄文前期から古墳下層の土層が連続している。ここでは奥平の遺跡のある区域の大半はおおむねこの時期に形成されていると考えておきたい。
- 注2. 岡野寛治は、奥平の分析をとおしてここにいう遺跡を三世紀以上または、五世紀以上の古くも定まる尺貫である「河越式宮」に認定すべきであるとしている（岡野、1978）。
- 注3. 石塚正は、奥平町の「河越遺跡」については、所在の古さが定まらなくともなく、未分化で不明確である。（石塚、1973）ことを指摘している。

引用・参考文献

- 石塚正 (1971) 『日本の古代国家』、岩波書店
- 跡上辰明・長谷川信 (1983) 『寛文町、本庄市合神戸・河越遺跡の調査』、『第15回近代史学研究会報告委員会資料』埼玉考古学会。
- 西野寛治 (1978) 『奈良時代における武官の成立と展開』、『古代研究』19
- 金子卓也 (1968) 『奥平八幡宮』、埼玉町教育委員会
- 野宮史郎 (1977) 『神代遺跡』、埼玉町教育委員会
- 鹿本利雄 (1980) 『大久保山』、早稲田大学本庄校地文化財調査室
- 鹿本利雄・野宮史郎 (1973) 『寛文町・奥平村史跡山内遺跡発掘調査報告』、『第6回近畿学研究会報告委員会資料』埼玉考古学会
- 鹿本利雄・西口正純 (1981) 『河越・奥の内遺跡』、河越遺跡調査会
- 大庭八郎 (1966) 『古墳調査報告書第一編』、埼玉町教育委員会
- 高野一夫 (1982) 『新五郡古代史研究報告書』、埼玉郡史編さん室
- 田口一彰 (1975) 『河越遺跡及び河越遺跡における前方後円墳の研究』、『いぶき』5-9合併号
- 戸田芳夫 (1961) 『山内町の遺跡的調査と中世前期の村落』、『ヒストリア』29
- 丸山卓郎 (1967) 『丸山遺跡における丸山前期の遺跡一帯に河越遺跡を含めて』、『史跡』10-1
- 藤 達 (1981) 『寛文町八幡山遺跡発掘調査報告書』、埼玉県立寛文高等学校
- 藤野敏夫 (1984) 『埼玉県河越遺跡の河越式宮の調査報告』、『古代文化』19

(參考資料)



22025 阿和城跡の平面図(1)



22025 阿和城跡の出土品(1)

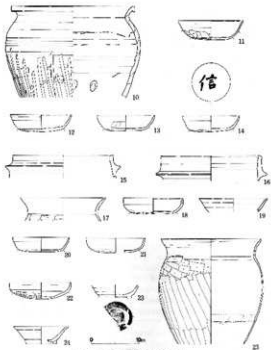
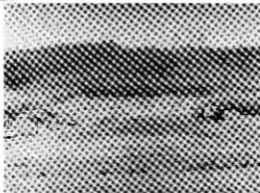


图44 河内县西村西周土器物 25

(10号在1—9, 1号在30—34, 2号在付定坑, 7号在坑, 5号在17—18, 6号在30—31, 8号在22, 9号在坑, 4—6号在付定坑, 4号在25)

圖 版



1. 河蚌類產卵人並点産卵(西北方)



2. 河蚌(中央部)(北西方)



1. 鋼在 10^4 °C中 (面取上)



2. 鋼在 400° C中 (面取上)

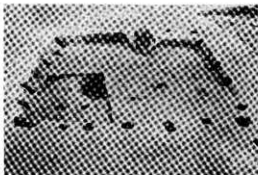
图 4



1. 图 1 噪声干扰



2. 图 1 噪声干扰的分布



1. 圖 2 材料顯微



2. 圖 2 材料顯微(放大)



1. 图 2 中保存完好之物品 1; 从图 1(2)



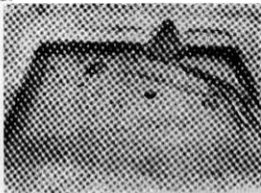
2. 图 2 中保存完好之物品 2; 从图 1(2)



1. 400x 透射电镜



2. 400x 透射电镜



1. 第4a、5a位相図



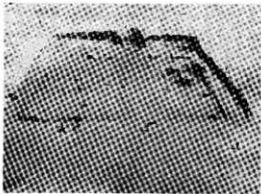
2. 第4a相位図の逆相図



1. 孢子与菌丝碎片



1. 孢子与菌丝碎片(×400)



1. 第 4 号位特征



2. 第 6 号位特征点特征



1. 图4号伴生足弓牙/齿组织物集中地区 (1)



2. 图4号伴生足弓牙/齿组织物集中地区 (2)



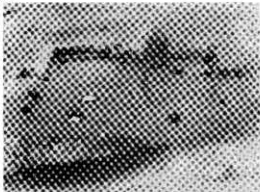
1. 第4号位磁磁晶体的正状图 (10)



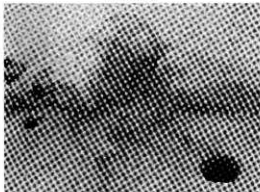
2. 第4号位磁晶体的正状图 (20)



3. 第4号位磁晶体的正状图 (20)



1. 電子顕微鏡像



2. 電子顕微鏡像



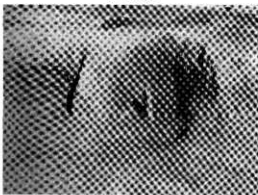
1. 第 4 种细胞柱



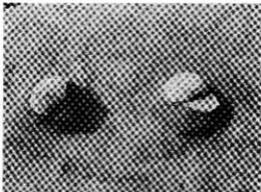
2. 第 5 种细胞柱的丫丫



1. 第 8 号位图组



2. 第 8 号位图组 a) 7)



1. 圖 1 中物體輪廓的上下次圖



2. 圖 1 中物體用輪廓表示之次圖 (1)



3. 圖 1 中物體用輪廓表示之次圖 (2)



1. 第10号位開紙



2. 第10号位開紙の裏



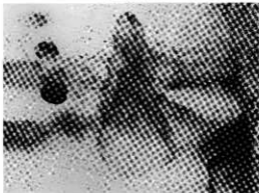
1. 第10号仁藤社製蜘蛛土状態 (1)



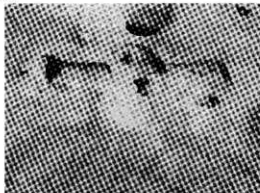
2. 第10号仁藤社製蜘蛛土状態 (2)



1. 图11a、b、c的复制品



2. 图11d与e的复制品



1. 菌丝体切片



2. 菌丝体切片

足尾町文化財調査報告書第3巻
阿知越遺跡Ⅰ

足尾町教育委員会文化財調査部編纂（発行）調査報告書

昭和58年3月21日印刷

昭和58年3月21日発行

発行所 足尾町教育委員会
埼玉県足尾町足尾町大字八幡1-1-10

印刷所 たつみ印刷株式会社
埼玉県足尾町大字大宮2-2-1